Expansion－エクスパンション－

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｘｐａｎｓｉｏｎ－エクスパンション－

【Ｎコード】
Ｎ３５６２Ｒ

【作者名】
河野　る宇

【あらすじ】
＊Ｅｘｐａｎｓｉｏｎ－エクスパンション－それは「拡張，　拡大（版）；　膨張；　発展」人類は広大な宇宙を手にし、さまざまな者たちと交流・戦闘を繰り返す。しかし……青い地球から飛び出したものは人類だけとは限らない――
※小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。他ＳＮＳにも掲載しています。

◆第1章～ストライダー

「おい。待てよ！　待てって……白銀(はくぎん)！」
「その名で呼ぶんじゃねーよ」
銀髪の男が後ろを歩く男にギロリと睨みをきかせる。　瓦礫(がれき)を避けつつ2人の男は歩みを進めていた。
もう何百年も前に廃墟となったであろうその建物は雨ざらしの床で2人を迎える。天井を見上げると星の輝きが目にしみる程だ。
「なんだよ。白銀って呼ばれてるじゃん」
「俺がつけたんじゃねぇ。どっかの誰かがつけたんだ。そもそもダチなんだからそんな名前で呼ぶなっつの」
「悪かったよ。おまえ足速いな、依頼主ほっぽらかして行くなよな」
「おまえの足が遅いんじゃないのか？」
「よく言うぜ」
しばらく歩くと大きな機械の置かれた部屋にたどり着く。グレーに統一されたソレはとても動くとは思えないシロモノだ。
「これか？」
白銀と呼ばれた男はボタンやキーの付いた機械に手を置く。

＊白銀ーはくぎんー

「ああ。約２０００年ほど前の管制室らしい」
ディランの言葉を聞きながら周りを見渡し調べ始める。確かにどこを押しても小さなレバーを倒しても何の音もしない。
聞こえるのは外の風と踏みしめるガラスの破片や剥がれた床のタイルと崩れた壁のなれの果てくらいだ。
「それじゃ始めるか」
銀髪の青年は右手首を掴みウォーミングアップするように動かした後、両手を機械の上に乗せて集中し始めた。
「……」
その光景を固唾(かたず)をのんで依頼主は見守る。
バチッ！　と激しい火花が散った瞬間、起動音が部屋に響いた。
「やった！」
「ふう……」
一息ついて愚痴をこぼす。
「まったく。こんな事は政府でやれよ」
「出来なかったからおまえに頼んだんじゃねぇか」
白銀はその言葉に呆れて溜息をついた。
「連邦政府ともあろう処が民間に頼むほど人手不足か？」
「うるせーな……人手は十分に足りてるんだよ。質だ質。お前が特別なの」
「そうか？」
とぼけたように言うと依頼主（友人）は深い溜息を吐く。
「シルヴィ」
「なんだよディラン」
「呪(まじな)い師とか止めて、まっとうに生きたら？」
「……おまえにだけは言われたくない」
「なんだよ、政府に勤める事がまっとうじゃないってのか？」

「職業より生き方」
くっくっと喉の奥で笑う。
「てめ……っ！」
「それより、ちゃんと金払えよ」
「金？　当たり前だろ。一応政府からの正式依頼なんだから」
「それならＯＫだ」
「おまえ程のストライダーならどこもほっとかないと思うけどなぁ」
「俺はフリーが性に合ってるの」

宇宙歴３０５２年――人類は小さな惑星から宇宙に飛び出し、その居住範囲を広げていた。
数え切れない星系を旅し、そこに住まう者たちとの交流・戦闘を繰り返し現在に至っている。
その間に人類は特殊な能力を解明し活用する術（すべ）を学んだ。その中に電子機器を狂わせる能力がある。彼らの事を『ストライダー』と呼ぶ。
青年の名はシルヴェスタ・アークサルド。かなり優秀なストライダーである。緑の瞳に白銀の髪は腰まであり、髪の左横にアメジストの髪飾りをしている。
友人の名はディラン・ウォレストマン。人類の統合組織『銀河連邦』に所属している、しがないヒラだ。赤茶色の髪と青い瞳。可愛い顔立ちをしている。
彼らがしていた事は、『遺跡発掘』。人類が宇宙に飛び出した頃のデータを収集している。
２０００年以上も前の電子機器は古すぎて調べるのに一苦労なのだ。まず、上手く起動してくれない。そういう時はストライダーの出番なのである。
周囲に影響を与える事が出来る能力は起動の仕方が解らなくともその能力で起動させてしまえばいい訳だ。
「さてと動いた事だし。上司に報告だ」

「んじゃあ金は俺の口座に振り込んどけよ」
「解った解った」
上司に電話をするディランに背を向けて別れの挨拶をする。
「……」
その光景を一瞥しシルヴェスタは苦笑いした。
2人きりで来た、という事は……
「腕試しだな」
何人もの政府のストライダーが来て起動出来なかったシロモノだが、調べた結果はさほど重要な情報があるとは思えないコンピュータだったのだろう。
普通なら下っ端と1民間人の2人だけで遺跡の発掘を任せるはずがない。
ディランは「上司に発掘を任された！」と上機嫌だったがそんなに簡単な事ではないはずだ。
「俺の能力を信用してないのか、俺自身を信用してないのか」
自分の宇宙船に乗り込むと伸びをしたあとエンジンを始動させた。
居住を諦め無人となった惑星に政府が欲しい情報など無いのだろう。植民地として利用しようとしたため、かろうじて酸素は存在するが……
「結局、何も育たなかった」
おそらくそういった処だろう。勝手に納得して彼はこの惑星を後にした。

しばらく宇宙で彷徨(さまよ)っていると通信が入る。
「チッ」
折角散歩してたのに。と喉の奥で舌打ちした。
「ケインか」
＜白銀、依頼だ＞
この名前は好きじゃない。一体誰が付けたんだか……通り名となってしまっているため、もう消しようがない。

「場所は？」
＜イエロートラック・キャット。名前はナナン・セリオル＞
「砂漠とジャングルの惑星か……」
＜ああ、それのジャングル側。メルローズ港に行ってくれ、そこで待っているらしい＞
　白銀は眉間にしわを寄せてモニター向こうの仲介者に話しかけた。白銀の仲介者は同じ地球人だ。その方が仕事のやりとりがスムーズである。
「仕事の内容は？」
＜モンスター退治＞
「……なんの」
＜それは会ったときに話すってさ。お前にしか出来ないらしいぞ＞
　白銀は頭を抱える。何を倒すか解らないのに受けたのか……
「で、いくらなんだ？」
＜１００万＞
「１００万クレジット？　たったの？」
　倒す対象が解らないのに１００万？　呆れる俺にそいつはニヤリとした。
＜前金でな。残りは倒したあと２００万＞
「合計３００か……仕方ない」
　白銀は惑星イエロートラック・キャットに進路を向けた。
　ストライダーがモンスター退治？　聞くとかなり怪しい話だが本来の彼の仕事はストライダーではない。彼の数ある能力の内の１つに過ぎないのだ。
　人類が宇宙へ飛び出した時、地球から出たのは何も人類だけじゃない。
『地球に住んでいた固有種たち』
　ほとんどの人間の目には見えない種も一緒に宇宙に飛び出した。
　それは幻想の中だけの存在たち……彼らは人類と共に外へ、そしてあちこちに広がり増えて時にはそこにすでにいた種と交わり、元

々地球にいた幻獣たちも今や『外来種』として宇宙中に拡がった。
こんな時代でも占いや呪いは廃(すた)れず占い師や除霊師、霊能者に俺のような呪い師が数多く存在する。もちろん白銀の呪(まじな)い師は表の顔。
武器関係にも詳しいためクリーチャーやエイリアンなんかも引き受ける事がある。幽霊・化け物なんでも来いだ。
モンスター退治。というからには依頼主もその手の能力があると見た。

『惑星イエロートラック・キャット』
恒星の関係で惑星の半分は乾期が多く半分は雨期が多い。
白銀は目の前に広がるうっそうと生い茂る木々を見つめた。彼はここが好きなのだ。多くの『マナ』を湛えた大地。そこに立っているだけで気分が落ち着く。
そうして周りがジャングルに囲まれたメルローズ港に降りた。船から出るとそれらしい姿は見えない。
「？　まだ来てないのか？」
その時――別の船が白銀の船の近くに降りてきた。依頼主か？
そう思ったのだが、船体にペイントされた赤い翼と剣のマークに眉をひそめる。
「……おいおい」
エンジンを切った船から人影が降りて来た。明らかに白銀に向かってくる。かなりの金髪美女だ。
女は白銀を確認するとおもむろに話しかけた。
「久しぶりね。シルヴィ」
「ライナ……1ヶ月振りか。偶然だなぁ」
「ホントにそう思ってる？」
意味深に語るこの口ぶり。嫌な予感……白銀は慎重に間合いを計った。
「単刀直入に言うわ。あなた『メナス・オリオール』に入らない？」
「冗談だろ？　いい噂の無い組織じゃないか」

「当たり前でしょ、名前からして良い事してると思う？」
「で、それがどうした？」
女は白銀に右手を差し出し傲慢（ごうまん）な態度で言い放った。
「あなたの力が欲しいんですって。来てもらうわよ」
やっぱりか！　瞬間、襲ってくる光の矢を避ける。
「……」
白銀は破壊された地面を一瞥し苦笑いを浮かべて女を見つめた。
「それがつい1ヶ月前までつき合ってた元彼氏に対する態度かね」
「もう1ヶ月も前よ。フられた腹いせだと思ってくれていいわよ？
あなたをつれていけば私はもっと高い地位が貰えるの。いいでしょ」
『羨ましいだろう』という風に発言するが羨ましい訳が無い。
つれていかれる本人はどうなるんだ。
「おまえ……その組織に入ったのか」
「何か文句でもある？」
白銀は溜息混じりに薄笑いを返した。
「まったく……俺のつき合う女はこんなのばっかだな」
仕方ない、こんなヤクザな仕事をしているんだ。そんな女がすり寄ってくる事はよくある。確か前の女もそうだった……と嫌な過去を思い出す。
「大人しくしなさい。あなた程の『エナジー・ブレイン』なら元恋人の私も鼻が高いわ」
「やってる事が凶暴だぜ」
向かってくる光の矢を避け続けるのは無理だ。こいつの力は知っている。だが……
「どうしたの？　女だからってナメてるのかしら」
「俺はおまえほど割り切っちゃいないんでね。記憶をそうそう帳消しには出来ないのさ」
「だったら素直に捕まって頂戴。あなたが必要なのよ」

＊ナナン・セリオル

女は周りに無数の光る球体をちらつかせた。あれが一斉に襲いかかってきたらさすがの俺もヤバいな。と白銀は苦い表情を浮かべる。

「仕方がない……」

つぶやいた瞬間――無数の光る矢が彼に向かってきた。

「！？」

舗装された地面は大きく砕かれ風が舞い、激しい攻撃に土煙が視界を遮る。

「……」

煙が風に運ばれ女が白銀のいた場所に目をやる。

「！　さすがね」

彼の周囲１ｍには円形に形作られた線が描かれ攻撃が当たらなかった事が窺えた。

その右手は、スラリと女性を思わせる手に変化している。防御していた腕を降ろし白銀は女を睨み付けた。

「ライナ、俺に敵わない事くらい知ってるんじゃないのか？」

「……」

女は冷や汗を流す。確かに勝てない相手だと知っていた。それでも勝算はあったのだ。

「あなたは優しすぎるのよ」

その言葉に白銀は口の端をつりあげる。

「なるほど。俺の甘さを狙ったか」

だが女はそれでも男には勝てなかった。この先戦ったとしても結果は負けだ。傷を負ってまで負ける勝負はしない。

ライナは諦めて自分の船に歩みを進めた。船に入る直前ライナは白銀に目を向けてつぶやく。

「出来ればこんな再会の仕方、したくなかったわ」

でも……女は次の言葉を飲み込んだ。彼なら解ってくれるだろう。

「……ライナ」
もちろん白銀は彼女の行動を理解した。自分は狙われているのだと気付かせるための攻撃だと。
飛び立つ宇宙船を見送って白銀は自分の船に戻る。
「誰だ？」
コクピットに入ると知らない老人がそこにいた。見た処、地球人ではなさそうだが。
「ナナン・セリオルじゃ」
「ああ、依頼人か。ちょっと待っててくれ」
白銀はひと息つくためにイスに腰掛けた。乾いた喉を水分で潤す。
そんな青年に老人はおもむろに話しかけた。
「お前さんの彼女か？」
白銀は不機嫌そうに答える。
「元彼女だ。そもそもなんだって俺が狙われるのか……」
これ以上の詮索はお断りだ。白銀は話題をふった。
「で、何を倒せばいいんだ？」
「おお忘れとった。自己紹介がまだだった。わしはナナン・セリオル。スナイプ人じゃ」
「スナイプ人か。どうりで」
独特の容姿は地球でいう爬虫類に似ている。彼らは生まれながらにして特殊な力を持つとされ、白銀たちの言葉で言えば『エナジー・ブレイン』だ。
平たく言えば霊能力者や超能力者である。
「スナイプなら自分でなんとか出来るんじゃないのか？」
「こんな老人にかね？　冗談も休み休み言え」
確かにかなりの高齢には見えるが……緑の肌と白く長い髪を見やる。
「すまんね。スナイプの見た目の年齢はわからないもんで」
個々の区別だってつかない。スナイプ人から言わせれば人間の区別の方が付きかねない。

「それで何を倒せばいいんだ」
再度、聞き返す。いつまでじらす気なんだこのジジイ。と白銀は急かすように語気を少し荒げた。
「とても難しいモノじゃよ。お前さんに手伝って欲しいんじゃ」
そう言うと老人はおもむろにバックパックに手を入れた。
そこから出てきたものは――
「なんだそれは？　随分変わった波長を……」
「お前さんにこれを『倒す』のを手伝って欲しいのじゃ」
それは直径１５ｃｍ程の淡い色を不定期に変える不思議な輝きを放つ球体。
「……」
見たことも無い輝きに白銀は目を奪われそうになる。囚われそうになる意識から白銀は我に帰ろうと頭を振った。それを見た老人は安心したように小さく溜息を吐き出す。
「これはこの世にあってはならぬモノじゃ」
「一体なんなんだ。これは」
「わからんのか？　お前さんともあろう者が」
「……？」
言われて再びまじまじと見つめる。意識を奪われないように、自我をしっかりと持ちつつ。
伝わる波長がいつも森の中で感じるソレに似ていると思った。
「お前さんなら解るはずじゃ。いつもマナを感じていたろう？」
「マナ？」
思い出そうと目を細める。どこかで感じた感覚……マナ、大いなるマナの――
「！　まさか『マナ・グロウブ』！？　しかしあれは……っ！」
「この世に破滅をもたらす球。わしはこれを破壊したいのじゃ」
「破壊……」
白銀は息を呑んだ。伝説とも言うべき『マナ・グロウブ』が目の前にある。これを手にすれば全てが思いのままと伝えられるエネル

ギーの集合体だ。喉から手が出るほど欲しがってるヤツはごまんといる。だが……
「これはあってはならぬもの。お前さん欲しいのか？」
ひょい、と俺の前に差し出した。
「……っ」
気軽に手渡そうとして白銀は少し体を強ばらせる。
「壊すならどこでも出来るだろ」
青年は喉を詰まらせた。
「これを何だと思っとる。膨大なマナを蓄えたモノじゃぞ。むやみに刺激を与えたらどうなるか考えんかい」
怒られた、なんで俺が怒られにゃならんのだ。ふてくされてジジイの言葉を聞く。
「向かって欲しいのは我が故郷スナイプ星。その火山にコレを放り込む」
「なんでそれが俺にしか出来んのだ。そんなの自分でやれよ」
するとまた老人が怒り出した。
「出来ないから頼んどるのだろうが！　ここまで来るのに必死だったのじゃ！　波乱をもたらす球は色んな物を引き寄せる。何の関係もない者たちを巻き込む訳にはいかんのじゃ！」
いい加減にしてくれ、俺が怒られる道理はない。
「俺だって関係無いぜ。巻き込むなよ」
「関係ない訳なかろ」
「何故だ」
しれっと応えるナナンに白銀はぶっきらぼうに問いかけた。
「ここまで知ってしまった以上、無関係ではなかろうが」
「……」
しばらくの沈黙――
「しまった！　騙したなジジイ」
「フフン、じっと聞いてるお前さんが悪い。さあ後戻りは出来んぞい」

ゴーゴー！　と俺を急かせるこのクソジジイ、宇宙に放り出してやろうか。白銀は本気で殺意が芽生えそうになった。

なんてこった。とんでもないモノに関わっちまった。変な組織には狙われてるし、この先どうなる事やら……

頭を抱えて向かった座標は『惑星スナイプ』――そこはすでに無人の星。

◆第2章～星の意志と波乱の幕開け

ハイパードライヴを繰り返したどり着いた『スナイプ星』
「案外すんなり来たじゃないか」
老人にそう言うと俺がいるからだそうだが、そういうもんなのかね。コクピットから目の前に見える星。その姿に老人は目を細める。
「豊かだった我が故郷……」
「……」
白銀はしばらくその姿を見つめていた。
「確か内戦だったな」
「そうじゃ……登り詰めた力は結局の処、ただの邪魔でしかない」
スナイプはその能力で自滅した。
『強き者は正しく優しくあらねばならない』
それがスナイプの教えだった。それがいつの間にか道を外れ、その力により統治しようとする者が現れた。
支配しようとする者と阻止しようとする者とに別れ……彼らは分裂した。
スナイプは『大いなる慈愛の惑星』と言い伝えられる。この星そのものが彼らの崇拝する対象でもあった。

＊マナ・グロウブ

生まれついてのエナジー・ブレインである彼らの意識に流れ込んできたのは……

『惑星の拒絶する意思』

彼らは愕然とし争い合った自分たちを恥じた。そうしてこの惑星は無人となったのだ。

閑散（かんさん）とする宇宙港に降り立つと、老人は懐かしい空気を静かに味わった。それでも星の拒絶する意思は伝わってくる。嘆きたい気分になるが彼はそれをぐっとこらえた。

「強烈だなこりゃ」

白銀は濃いむせかえるような霧の中にいるような感覚で一瞬目がくらむ。普通の人間には感じる事の出来ないエネルギー、しかし確実に存在する力。

「慣れたかの？　お前さんには少々つらいかもしれんな」

そう言って白銀に目線を移すと老人はビクリと体を強ばらせた。拒絶されている自分とは違い、彼の周囲には淡い色をしたマナが取り巻いていた。

あの時から全てを拒絶してきたはずの『スナイプの意思』が彼だけには違う意思を表している。

白銀はそれにはまったく気付いていないようだが。

「で、ジイさん。どこの火山に放り込むんだ？」

聞かれてハッと我に帰った。

「あ、ああ。ここから南に２０ｋｍ程行けば大きな火山がある。そこじゃ」

「じゃあ車がいるな。そこで待っててくれ」

白銀は宇宙船の中に消えた。

その間、老人は何かを考えているようだったが車で来た白銀を見ると溜息混じりに発する。

「遅いのぅ」
「うるせぇな……早く乗れよ」
走らせる車の中でナナンはぼそりと問いかけた。
「スナイプはどうじゃ？　白銀」
「ああ、いい処だな」
「クックッ……こんな星がかね？　廃墟ばかりだ」
老人はそれを聞いて苦笑した。
「確かにな。でもいい処だぜ」
「……ありがとう」
火山近くまで来ると車では無理そうだった。2人は歩いて火口付近まで近づく。歩みを進めるにつれ足下から熱が伝わってきた。
噴火はしていないようだがいつ火を噴くとも限らない緊張感が辺りを満たしている。
斜面を登る。途切れた部分が近づいてきた、あそこが火口だ。登り切った処で灼熱の溶岩が2人を迎える。のぞき込むと吸い込まれそうになる。
「さすがに熱いな。ジイさん早くしろよ」
「……」
取り出した『マナ・グロウブ』を老人はしばらく見つめた。
「！　何を……」
老人はそれを白銀に差し出した。そして静かな眼差しで白銀を見上げる。
「お前さんが放り込んでくれ。わしではダメなようじゃ」
「！？」
いきなり何を言い出すんだこのジイさん。と白銀は驚いてナナンを凝視した。
「な……っ」
どうやら本気のようだった、少しもその手を引っ込める気配は無い。
「なに……言ってる。自分でやれよ」

「わしではだめなんじゃ、星がそう言うておる。お前さんでなければ星は納得してくれん」
「納得ってなんだ？　ただ放り込むだけじゃ壊れないのか？」
しぶっている老人に白銀は再び問う。
「ジイさん。はっきり言えよ！」
「これは膨大なマナを蓄えている。と言ったな。それを放り込むのだ、星自身もただでは済むまい」
白銀はその言葉に愕然とした。
それはつまり――
「この星が崩壊するって事か？　そんな事をあんたはするためにここに来たのか。それを俺にやれって言うのか！？」
「お前にさせるつもりは無かったのじゃ。だが、星はお前を望んでいる」
「星だって？　星なんかに意思なんてあるものか！　俺はゴメンだ。人様の星を破壊するなんて！」
拒否する白銀に老人は必死に訴えた。
「他の星はそうかもしれん。だがこの星だけは、スナイプだけは違うのじゃ！　お前さんでなければ星はこれを壊してくれないと言うのじゃ。壊さずに再びこれを吸収すると言うんじゃよ！　頼む……」
すがる老人に白銀は大きく肩を落とした。
「だったら吸収させればいいじゃないか。それでそいつは消えるんだ、あんたの望んだ通りだろ」
俺には理解出来ない、星を崩壊させるなんて。
「違う！　わしの望みはこの球の破壊じゃ。2度と再びこの球が生まれないようにするのじゃ」
老人は大きくかぶりを振った。白銀はその言葉に眉をひそめる。
「ちょっと待てよ……なんでこの星の崩壊とその球が関係あるんだ？」
「『マナ・グロウブ』はこの星で生まれる……スナイプの大いなるマナは際限なく生み出され、周り切らなくなったマナが固まり出来

上がるのじゃ」
「！　そんなカラクリが……」
「お前さんは伝説としてしか知らんじゃろう。だが、こいつは確実にこの世を波乱に導く……これ以外にもまだあるかもしれん。もうこれ以上こいつを増やしてはいかん！　増えれば増える程、波乱は拡がっていく。この宇宙全体を覆い尽くすかもしれんのだ」
　決断が迫られていた。
「……」
　白銀は老人から球を受け取る。
「悪い気は発してないぜ。それでも放り込むのか」
　優しく包み込むマナが体に流れ込んでくる。これを放り込む……？
「それは持つ者の善し悪しで決まる。お前さん、それを永遠に持つつもりか？」
　色んなモノを引き寄せる球体、そんなものを持っていればどうなるか解らない訳じゃない。
　だが、こんな球と引き替えに星が1つ消えるかもしれないと思うと躊躇して当たり前だ。そんな白銀の頭の中に静かな声が響き渡る。
『早く投げなさい、あなたが気にする事ではない。これは私の責任でもあるのだから』
「えっ！？」
　振り返る、誰もいるはずなどないのに今のは……？
「どうした。星の声でも聞いたかの？」
「ジイさん……」
　老人の顔を見て、おもむろにマナ・グロウブを火口に投げ入れた。溶岩の中に消えていく球を見つめたあと白銀は老人を連れて急いで降りる。
　こんな処でのほほんとしている場合じゃない。早く逃げないと星が！　その途端、地面が小刻みに震えだした。
　ハンドルをとられながら宇宙船まで車を走らせコンテナにそのまま乗り込む、駆けだしてコクピットまでの間に揺れは大きくなって

いた。
「ジイさん座ってベルトをしっかり閉めろ！」
「こ、こりゃ凄い揺れじゃな……」
その間にも、地面が船を飲み込もうと音を立てて割れ始めている。エンジンを目一杯ふかして飛び立つ。
なんとか飛び立っても油断は出来ない。必死に速度を上げて惑星から離れようとするが、崩壊を始めた星はその重力を強めていく。
「チッやばい……ジイさん姿勢を低くして衝撃の準備しろっ衝撃波が来るぞ！」
重い音が船全体に響く、後ろから突き上げるような激しい衝撃が何度か襲ってきた。しばらくするとそれも消え静かな空間が拡がる。
もう大丈夫だろうと速度を落としコクピットを惑星に向けた。

＊ディラン

「スナイプ星が……」
老人はか細くつぶやいた。
「……」
『球を生み出した責任』
星はそう言った。
己自身でも止められないモノにさえ責任がともなう。それがこんな結果にもなるのか。と、白銀は大きな輝きを放ち崩壊してゆく星を見つめた。
惑星は消滅は免れたようだがもはや人が住める星ではなくなった。白銀は小さく溜息を漏らしてシートの背もたれに体を預ける。
「とりあえず……残りの金を貰おうか」
切り替えてナナンに発した。
「故郷が消えて泣いておる老人から金を取るとは悪人じゃな」
白銀はふっ……と薄笑いを浮かべた。
「そう言うと思ったよ。こっちもな、前金１００万で星をぶっ壊すとは思わなかったね。後の２００万よこせ」
実際は仲介料込みなので彼に丸々１００万が入る訳ではない。
「そんなものをむやみに持ち歩くと思うのかね？」
「だろうな。近くの惑星に降りるぞ、船の修理や補給もしないと。金を頂いたらジイさんともお別れだ」
「えぇ～？」
とても残念そうにつぶやく老人に目をやったあと肩を落として大きな溜息を吐いた。
「ジイさん……本当に金はあるんだろうな？」
「あ、当たり前じゃ！　ちゃんと年金が銀行に入っとる」
年金ねぇ……そんなものスナイプにあったっけか？　半信半疑の白銀に通信が入る。

「ディランか、なんだ？」
＜今どこにいるんだ？＞
「今？　スナイプの近くだ」
＜ええっ！？　スナイプって原因不明の崩壊を始めたって星じゃないか！＞
白銀は苦笑いした。その張本人が自分です。なんて言えない。
＜まあいいや、そこからなら『リューシャン』に近いだろ。来てくれよ＞
「リューシャン？」
確か銀河連邦の本拠地じゃないか。
＜政府がまたお前に頼みたいんだってさ。シエンナ空港にヨロシク＞
「……」
用件だけ言って切りやがった。旅費と修理代に金が欲しいのは確かだ。もっとも、口座の方にはかなりの金が入ってはいるのだが。

空港に着くと白銀は船の修理を頼み、あれから連絡のあったレストランに向かう。個人が持つにはデカすぎると言ってもいい船に修理を頼まれた男たちは『この男はどんな金持ちなんだ！？』と呆然とする。
「なんでジイさんまで来るんだ」
「金が欲しいのじゃろ、わしを見張っておかんと逃げるぞ」
「言ってろ」
呆れて止める気にもなれなかった。今回は別に隠しておくような仕事でもないし。それにスナイプ人なら裏の仕事も隠す必要は無いか。

レストランに入ると一番奥のテーブルにディランがいた。白銀を見つけ笑顔で手を振った。
「！」
ふとついてくる老人に目をやる。

「誰この人」
「ん、ああ。気にするな」
「どうもどうも、ヨロシク。ナナン・セリオルじゃ」
「あ、どうも。ディラン・ウォレストマンです」
老人から差し出された手を素直に取って握手を交わす。その光景を白銀は席に着きながら溜息をもらした。彼はお人好しなのだ。
「おぬし、連邦に友人がいるのか。大したもんじゃな」
「別に俺が凄い訳でも、こいつが凄い訳でもねーよ」
「あはは、確かに。たまたま受けたら受かっただけだもんな」
なんだそれは……そんな軽いノリで受けられちゃ連邦だってはた迷惑だ。相変わらずの軽い親友に白銀は心の中で呆れた。
「で、依頼の内容は？」
「そりゃ遺跡発掘。えーとね、『ガースノリティ』だ」
「工業惑星だな」
あそこは数千年前から工業惑星として栄えていた所だ。遺跡にもその手の情報があるだろう。
「立ち入り禁止区域にその遺跡があるんだ。何度やっても起動してくんないんだってさ」
「なるほど。で、今回も俺とお前だけか？」
「いいや、向こうに何人か調査員が待ってるってよ」
という事は今度は本気の依頼か。また腕試しなら断ってやろうかと思ったが。
「いつ出発出来る？　俺はお前の船で一緒に行くから連絡してくれよ。こっち（調査員）はもう準備出来てるんだ」
「そうだな……2日後に港に来てくれ」
「ｗｉｌｃｏ（ウィルコ）！　じゃな」
ディランは伝票を持ってテーブルから離れた。払ってくれるのは有り難い。注文しておいた料理に口を運ぶ。文句は言えないが俺が作った方がマシだと思う程の味だ。
「どうした？　ジイさん」

何か考え事をしている老人に白銀は声をかけた。不味くて手が進まないのか？
「ああ、いや。なんでもない」
2人はこらえながら料理を完食した。外に出てジュースを一気飲みして料理の味を消す。
「はあ……不味かった。あそこはあいつがよく行くトコらしいが」
「お前さんの友達は味覚オンチか？」
「それを言ったらあそこの常連はみんな味覚オンチだぜ」
これで流行ってるんだから不思議だ。

約束の日――ディランは港に行き白銀の船に乗る。
「それにしてもデカい船じゃのぅ～」
リビングルームで老人がディランに言った。白銀は進路の調整にコクピットにいる。それまでずっと老人は白銀と共にいた訳だが、残りの金を払うと言いつつ一向に出す気配は無く白銀は頭を抱えていた。
いっそ金は諦めて追い出してやろうかとも考えたのだが、『身寄りがない』とか『老人を足蹴にするのか』とか言いたい放題言われ追い出せずに今に至る。
「まあね～ここがあいつの家みたいもんだから」
コーヒーを傾けながらディランは応える。2人はのんびりと語り合っていた。　老人はお茶をすすり溜息1つ。
「と、いうとご両親は……？」
「それは――」
「そんな事聞いてどうする気だ？　ジイさん」
進路の調整から戻ってきた白銀が厳しい口調で老人に低く問いかける。少しの怒りがその瞳から窺(うかが)えた。あまり聞いて欲しくない事らしい。
「別に、ちょいと気になっただけじゃ。普通気になるだろがその年ならご両親がいたって別段不思議ではないし、親御さん心配しない

のかとかね」
「そういう時だけは随分とろれつが回るじゃないか。金の事になると年寄りぶった言い方するくせに」
今まで怪しい奴は色々いたが何が目的なんだ？　このジイさん。悪人ではなさそうだが。
「聞きたいっ聞きたいっ聞きたいのじゃ！」
「お、おいシルヴィ。なんとかしろよ」
「解ったよ……」
まったくこのクソジジイ。人の事聞いて何が面白いんだか……白銀は溜息混じりにイスに腰掛けるとゆっくりと話し始めた。
「そんな期待されるような事は無いぜ。親父は行方不明、おふくろは病院」
それだけ言うと部屋は静まりかえった。
「……それだけ？」
「それだけ」と、白銀。
「うん」ディランもうなずく。
「親父殿の行方不明とは？」
「知らねーよ。俺がまだ小さい時にいなくなったってだけだ」
「母上殿の容態はいかがじゃ？」
「さあ」
白銀の表情が少し硬くなった。あまり思わしくない様子だ。
「子供なんか産むからだ」
「！　シルヴィ！　お前まだ……」

＊ディラン（後書き）

※wilco（ウィルコ）＝ I will Complete（「了解」という意味）

◆第3章～消えゆく輝き

「元々おふくろは体力が無かった。なのに俺を産んだから」
「どういう事じゃ？」
「こいつ、おふくろさんが病気になったのは自分のせいだって思ってるんだ。俺はそんな事無いって言うんだけど」
「ほう、おかしな事を言うんじゃな。確かな因果関係も無いだろうに、自分のせいだなどとは」
「……それはっ……！」
何かを言いかけて白銀は口をつぐんだ。
すぐにでも言ってしまいたい――しかし、それはだめなのだと自分を抑制する。
「ふむ、まあよい。母上殿はお前さんを間違った方向には育ててないようじゃてな」
白銀はそれに苦笑いする。
「は……どうしてそうだと解る」
「見ていれば解るよ。お前さんはとても優しい」
「！？」
大の男に言う事じゃない。どう反応していいか解らないじゃないか。と照れたような顔をしている白銀にディランはニヤついた。
その時――通信が入る。白銀は部屋の端末からそれを受けた。

＊リャムカ

＜その船は白銀だな？　私を中に入れなさい。君にはその義務がある＞

なんだ？　この偉そうな奴は。モニターを見ると船の近くに同じ速度で飛んでいる小型船が見えた。

拡大してコクピットを映す。その姿は老人と似ていた。まさかスナイプ人か？

「……」

また何か騒動が舞い込んで来た予感。白銀はハッチを開ける。そこに入っていく姿がモニターに映り続いてコンテナ内に切り替えた。

ゆっくりと止まる船を確認しハッチを閉じる。船から出てきた姿を見てマイクのスイッチを押しコンテナに響く音量で発する。

＜そのまま真っ直ぐ来てくれ＞

男はそれを聞いて歩き出す。白銀はモニターを切ってナナンに視線を向けた。妙にばつの悪そうにしている老人。やっぱりこいつの関係者か……何が『身寄りがない』だ。

男を案内するために白銀は部屋を後にした。

「お師さま！」

入ってきた男はいきなり老人に駆け寄る。やれやれと白銀は肩をすくめた。

「突然『旅に出る』と申して私を困らせないで下さい。どれだけ探したと思っているのですか」

「じゃから探すなと言ったじゃろう……」

「何を言うのです！　弟子の私を放り出して」

そして男はギロリと白銀を睨み付けた。

「どうしてこの男にあなたの力が必要なのですか。私には解りません」

「！　……なに？」
俺にだってわからん。初耳だ。
「あんたの力が必要？　誰がそんな事言ったんだ」
白銀が目を細めて老人に問いかけた。
「……」
老人の目が泳ぐ。
この２人、師匠と弟子の関係らしいが俺が巻き込まれた経緯はまったく謎だ。
「そ、それはじゃな……え～と」
なんとか誤魔化そうとしているようだが今更遅いのに。と白銀はナナンを見下ろす。
「お師さま……スナイプ星が」
「ああ、解っておるよ」
老人は少しの陰りを見せたあと白銀に向き直った。
「お前さん。力の加減はできちょるかい？」
「！」
白銀は真面目な表情になった老人を見てしばらく沈黙した。
確かに最近、力が有り余っているというか暴走しそうな時がある。
「もっと大きな力に目覚めつつあるんじゃ。そのままでは自滅してしまう」
「！　大きな、力？」
白銀はディランをチラリと見た。老人はそれに気がつきリャムカに視線を移す。
「リャムカ。少し彼と話をしていてくれんか」
「え、はい」
老人と白銀は部屋から出て話を再開した。
「彼には言ってないのかね？『エナジー・ブレイン』の事は」
「普通の人間には理解出来ないだろ」
白銀はそう言って苦笑いした。
「まあ確かにそうじゃな」

「それで、力って？」
「お前さん、その力を何だと思っとる？」
唐突に質問される。そんな事訊かれたって……
「さあ……高次元の力だとしか」
「それは正しいが、お前さんそれを攻撃としてしか使ってないじゃろ」
「他にあるのか？」
「お前さん、そういう認識しか無かったのかい。それは回復が本来の力なんじゃぞ」
「！　そう……なのか？」
「これでもわしはエナジー・ブレインにかけては師と仰がれる程の者じゃ。お前さんのその力、わしが制御出来るようにしてやろう」
「本当か？」
「ただし……」
「金はまけろって？」
「む、そうじゃ」
バレていた。当然だ。ここまで金を払わないで引き延ばしているのにバレないはずが無い。白銀は諦めて溜息を吐いた。
「解った。その代わりしっかり教えてくれよ」
「もちろんじゃ」
『惑星ガースノリティ』までの道程（みちのり）の間、白銀と老人はトレーニングルームでその力を学んでいた。
ディランにバレないように取り繕（つくろ）うのに苦労したが、彼の楽天的な性格とリャムカが意外とお喋り好きという点が功を奏した。
そうは言っても、こちらが惑星に着く大体の日付は調査員たちに知らせている訳であって遅れる事は出来ない。
星に着くまでのほんの数日間だけでまだ制御出来ているとは言えないが、暴走するような感覚は消えた。
「後は仕事が片付いてからだな」
「うむ、かなり良くなった。まだ使いこなす事は出来んだろうが、

これから徐々に力の使い方も学んでゆけばよい。それにしてもこんな部屋まであるとはつくづくデカい船じゃな」
トレーニングルームから出てきた白銀に、後ろからついて同じく出てきた老人が話しかける。
「常に鍛えておかないとどんな相手に出会うか解んねーし」
白銀は苦笑いする。この船を買う時ディーラーから不審な目で見られたのは当然だがさすがに金がやばかった。とても個人で買うようなデカさじゃない。
今までの仕事で貯めた金が全てこいつに持っていかれた程だ。部屋の造りもオーダーメイド。こんな仕様をディーラーに持ちかけた自分もある意味凄いと思った。

トレーニングを終えてリビングルームでコーヒーを傾けていた白銀にコックピットのディランから通信が入る。
＜シルヴィ、港に着くぞ＞
「ああ、頼む」
「彼は大型船も扱えるのだな」
「大型貨物もいけるらしいぜ。ほとんどの船はＯＫじゃなかったかな」
「そりゃ素晴らしい」
運転技術までは素晴らしいのかどうかは解らないが……
船が港に着いて落ち着くまでの間に白銀はシャワーと着替えを済ませた。

白銀たちは立ち入り禁止区域に入り、依頼されたコンピュータがあるであろう大きな部屋のドアを開ける。
「まだ誰も来てないのか？」
白銀がそう言って後からリャムカとナナン、そしてディランが入ってくる。
「！」

すると、向かいのドアが開く。
「お、来た来た」
ディランが笑顔で彼らに向かおうとした時、白銀がそれを制止した。
「どうした？」
「何か……変だ」
入ってきたのは男3人。そして――
「ライナ……」

*ライナ

白銀はライナを確認してディランに目を向けず問いかけた。
「ディラン、どういう事だ」
「え？　何が？」
白銀とナナンは男たちのその手に刻まれている紋章を見逃さなかった。それを見た2人の目が厳しくなる。
男の1人が白銀を見て口の端を少しつり上げた。
「お前が白銀だな」
「だったらどうだっていうんだ」
「一緒に来てもらうぞ」と、もう1人の細身の男が言った。
「嫌だと言っても無理矢理連れて行くつもりだろ」
白銀はそう言うとライナをギロリと睨み付けた。
「自分が何をしているか解っているのか？」
「抵抗しないで素直について来て頂戴な。あなたをつれて行けば報酬をはずむんですって。いいでしょ」
「馬鹿な事を！」
吐き捨てるように言った白銀に男たちはゆっくりと歩み寄る。リャムカは老人の前に出て守るように身構えた。
「こりゃ！　お前はシルヴィを加勢せんかい」
「私はお師さまを守ります」
「な、何？　何が起こってんの……？」
状況の解らないディランはどうしていいか解らず右往左往した。
そうして突然――闘いが始まる。ガタイの良い男が白銀に向かって何かを投げる動作をした。
「！」
嫌な予感のした白銀がとっさにそれを避けると壁に何かが突き刺さるような激しい音が響いた。
「……」

白銀は息を呑む。三つ又に別れた矢が金属の壁に突き刺さっていた。
「なっ何アレ！？」
「こりゃヤバイ……奴は物質化能力を持っとるのか」
「があぁ！？」
投げられる矢を避ける白銀に今度は別の何かが襲いかかった。体がしびれる。
「ぐっ……」
光が走っってきた先を見ると細身の男の手から光る稲妻が発せられていた。そしてもう1人の男も白銀に向かってくる。
「リャムカ！　白銀を助けるのじゃ。でないと破門にするぞ」
「うっ！？　お師さま……」
老人の厳しい瞳にリャムカはため息をつく。
「！」
白銀に向かっていく男の前にリャムカが立ちはだかった。
「貴様の相手は私だ。いつでもかかってこい」
決してひるむことの無い屈強な肉体と精神のリャムカに男は少したじろぐ。老人はディランに近づき彼を守るような体勢をとった。
「ディラン、お前さんにはこれから起こる事をすぐには理解出来んじゃろう」
「一体、何がどうなってんだ？」

矢と稲妻の攻撃を白銀はなんとかかわしていた。イラついた男が矢を投げる仕草を白銀に見せつける。
「！」
その途端――白銀は動きを止めた。その仕草はライナに向けられていたからだ。男の前にいるライナは気付いていない。
そして男はニヤリと口の端を吊り上げ矢を放った。
「ぐぁう！？」
矢に気付き避けようとしたが一歩遅く右腕を貫いた矢はそのまま

白銀を壁に縫いつける。
「！！」
「シルヴィ！」
ナナンは体から血の気が引くのを憶えた。
「ぐうっ……」
「手間かけさせやがって」
縫いつけられた白銀に男は近づく。
「ちょ、ちょっと待ってよ。やり過ぎなんじゃないの？」
さすがにライナは白銀と男たちの間に入って意見した。
「邪魔だ、どけ」
「彼を捕まえろと言われたけどこれはやり過ぎよ。彼の力が必要なんでしょ？　怪我をさせてしまったらロクに動け……」
「確かに必要とはしているが別に五体満足じゃなくてもかまわん」
「！　どういう事？」
「ライナ……俺を殺せ」
「！　シルヴィ何を言って……」
「そいつらの手にある紋章は『奴』を崇拝しているサタニストたちのものだ」
白銀は矢に貫かれている苦しみで息が荒くなる。
「サ、サタニストって何？」
状況のよく解らないディランがナナンに尋ねた。
「悪魔を崇拝している者の事じゃよ。やはりこれは罠だったか。おかしいとは思ったんじゃ。この星の調査はすでに数十年前に終わっているハズじゃからな」
「えっ！？　どういう事？　知ってたならなんで教えてくれなかったの」
「別の遺跡が発見されたのかと思っておったんじゃ」
地球人と共に宇宙に飛び出した地球の全ては銀河系全土に拡がり。今や悪魔という存在すら他の星の人間にも敵意や崇拝される対象となっている。

「こいつの父親は『あの方』がかつて座していた地位にいる者。同じ血を持つこいつを生け贄に捧げれば『あの方』の封印は解かれるのだ！」
恍惚とした表情で男は天を仰ぐ。偉大な事を成し遂げるのだと言わんばかりの演説振りだ。
「奴をこの世に出してはいけない。解ったら俺を殺せ。そこからならそいつより先に俺を殺せる」
「……」
痛みで苦しむ白銀を見て男たちに目を移す。
そして――ライナは男たちに戦闘態勢をとった。
「！？　ライナ！　やめろ！」
「怪我人は大人しくしてなさい」
険しい目を男たちに向けて構えながら縫いつけられている白銀に発する。
「ライナ！　くそっ誰かライナを止めてくれ」
自分を壁に縫いつけた矢を必死で外そうとする白銀だがその矢はびくともしない。
「ライナ！　止めるんだ！」
痛みもあふれ出す血も構わずに白銀はライナを止めようともがく。いくら彼女が強いといっても白銀を捕らえるために遣わされたエナジー・ブレインだ。
それを2人も相手になど出来るはずがない。
「ディラン！　爺さん……頼む。ライナを止めてくれ」
白銀の必死の言葉にディランは前に出る。それをナナンが制止した。
「わしが行く。お前さんは危険じゃ」
そう言ってナナンがライナの元に行こうとした刹那――白銀の目に矢で胸を貫かれたライナが床に倒れ込む姿が映った。
「ライナァー！」
伸ばす手はライナには届かない。

「犬死にだったな」
倒れ込むライナに男がそう言って鼻で笑った。
「！？」
瞬間、ゾワリ……とするような気配が背筋に走る。
ただならぬ気配の先には白銀……ザワザワと銀色の髪がうねり、つり上がった目が男を睨み付ける。
あれだけ必死に抜こうとした矢がすっぽりと抜けてボロボロと崩れ落ちた。
「なんかヤバイ！」そう思った男たちは扉に向かって走り出す。
それを追おうとした白銀を「追わなくてよい！　もういいんじゃ。力を抑えろ」とナナンが制止した。
「……」
白銀はゆっくりと倒れているライナを腕に抱きしめた。
「……っ」
息も絶え絶えのライナは白銀にニコリと笑いかける。
「よかっ……た。犬死にじゃなくて」
「ああ、お前のおかげで助かったよ」
必死に声を絞り出す。震える体を必死に抑えライナに微笑んだ。
「……」
白銀はナナンを見た。しかし彼は頭を横に振り、助からない事を示す。
「俺の力でも……」
「おぬしの力は目覚めたばかり。まだ人を助けられる程の力は出せない」
少しずつ冷たくなっていくライナの体。白銀はどうにも出来ない自分に苛立った。白銀の頬にそっとライナが手を伸ばす。
「別れた女に涙を流すもんじゃないわ」
「ライナ……」
やめてくれ、ケンカ別れとかそんなんじゃない。お互い理解したうえでの別れだ。

「ラ――」
ぽとり、と手が落ちて一気にぬくもりが失われていく。見開かれた目に生気は無くナナンが静かにそのまぶたを閉じてやった。
白銀は数秒、呆然としたがライナの亡骸を強く抱きしめ体を震わせる。
「う……あああああああー！」

「怒っているかね？」
「ん？　エナジー・ブレインの事かい？」
「ン……まあ」
ディランの操縦で惑星ガースノリティから離れた船は何も無い宙域で停止していた。
白銀はコックピットで1人、宙を見つめながら何も考えられない様子だ。考えられないというよりも思考を止めているようにも見える。
ディランとナナンはリビングルームでコーヒーを傾けていた。リャムカはトレーニングルームを勝手に使っている。
背もたれに体を預けディランは柔らかい笑顔で応えた。
「あいつね……あんなきつそうに見えるけど、周りの人間の事を大事にしてるんだ。俺に本当のコト言えば、俺が危険な目に遭うかもしれないって思ってたのかもしれない」
あいつはいつもそうだった。とディランはぼそりとつぶやく。
「……シルヴィは良い友達を持ったな」
「！？」
ディランが何か言おうとした時――船内に警報が鳴り響いた！

◆第４章～追撃

「なんだっ！？」
ディランは急いでコクピットに向かう。
「シルヴィ敵じゃぞ」
「いいんだじいさん。そのままにしてやってくれ。こいつ今まで色々と忙しかっただろうからさ、ゆっくりさせてやってくれよ」
「しかし……」
「一体どうした？」
「リャムカ。迎撃の方よろしく」
ディランがそう言うとリャムカは無言で頷き船の後ろにあるレーザーに向かった。
「……」
ナナンは不安だった。白銀の操縦はいつも見ていたがディランのテクニックで果たして敵から逃げ切れるのだろうか。
「敵は小型艇３隻か……よし」
ディランはそういうとペロリと唇を舐める。すると一気に船は加速した。
「う、う……っ？」
その加速にシートに座っていたナナンは目を丸くする。もの凄い操縦で小回りの利く相手の小型艇に引けを取らない動きを見せた。
それでも大型のこちらは不利。大きな損傷は無いが敵の攻撃を受けている。
「やべえなこりゃ」
その時――相手の攻撃が船を大きく揺らした。

＊幻想の住人たち

「！　なんだ……？　一体何が……」
ふと白銀が我に返った。
「シルヴィ気が付いたか！」
ナナンが嬉しそうに声をかける。白銀はすぐに状況を把握した。
「ディラン俺に代われ！」
「ばかやろっ無理に決まってんだろ。それより迎撃の方やってくれよ！」
白銀はすぐに操縦席の左斜めにあるレーザー砲の席に座り、敵の小型艇に照準を合わせた。
敵の小型艇3隻はかなりのテクニックだ。こちらの攻撃が致命的にならない。白銀ははがゆい気持ちだった。
「！」
ナナンは焦る白銀の右肩に手をやり静かに彼につぶやく。
「落ち着けシルヴィ。ゆっくり深呼吸するんじゃ。意識を画面に集中して……目を閉じてもいい。レーザーが敵の船に向かって行く軌道を想像する」
「……」
それを聞いた白銀は瞼（まぶた）を閉じてゆっくり長く呼吸して集中を始める。
レーザーの発射ボタンを押した。
それは綺麗な弧（こ）を描いて追ってくる小型艇の1隻に当たる。
「次……」
つぶやいて白銀は再び発射ボタンを押した。そのレーザーもまた鮮やかに敵に当たる。
「……最後」
「やった！　さすがシルヴィ」
ディランは動きの止まった3隻の小型艇から全速力で遠ざかった。
「よくやったの」

ポンポンと2回ナナンは白銀の肩を軽く叩きコックピットから出る。
「はあ……」
白銀はホッとしたように背もたれに体を預け深いため息を漏らした。

船はとりあえず近くの惑星に向けて自動操縦にし3人はリビングルームへ――温かいコーヒーを傾け一息つく。
「で、あいつらが言ってたのって何……？」
ディランは改めて白銀に訪ねた。
「……」
白銀は重い口を開く。
「お前も悪魔くらいは知ってるだろう？」
「そりゃまあ」
「じゃあ、奴らが崇拝している奴も知ってるよな？」
「確か……ルシフェルだったっけ？」
「俺の親父はそいつが堕天した後に奴がいた位階（いかい）に置かれた。だから奴らは親父の血を持つ俺の命を欲しがってる」
「ちょ……っ。ちょっと待って！　それって……」
ディランは突然、空想の世界に入れられたような混乱を覚えて頭を抱えた。とにかく落ち着こうと深呼吸を繰り返す。
「それってさ……お前が天使の子供って事？」
白銀は否定も肯定もせずにディランから視線を外した。それで彼の言っている事が真実だと解る。ディランは唖然と白銀を見つめた。
「いや……えと。それって凄いな。何が凄いのかいまいちわかんないけど。とにかく凄い」
変な感心の仕方をしたディランに白銀は苦笑いを浮かべた。まだ混乱しているのだろうか、それとも完璧には理解し難いのか目がうつろだ。
「同じ位階である親父の血。その子供の俺を生け贄にする事で奴の

封印は解かれる」
　もともと天使には実態は無いとされる。罪を犯す事により肉体が現れるのだと……人を愛した事もまた罪なのかもしれない。
「それって、シルヴィの親父さんが天国にいるから息子のお前で間に合わせる……ってやつ？」
「……まあそんなとこ」
　ディランの理解に多少悩むが白銀は答えた。
「俺は天界にとっては『罪の証し』だ。その張本人は何をしているやら」
　白銀は薄い笑みを浮かべて皮肉混じりにつぶやいた。
「天界にはいばらの牢獄があるという……罪を負った天使が未来永劫、そこでいばらのトゲに血を流しながら罰を受ける」
　さぞ美しく、悲しい光景だろう。ナナンはそう言って目を伏せた。
　それに白銀は怪訝な表情を浮かべる。
「じいさん……あんた何者だ？　俺の事もまったく驚かないし。まるで昔から知ってるみたいな言い方じゃないか」
「……」
　白銀の言葉にナナンは視線を外して語り始める。
「遙か昔、ある天使が人間になりたいと1人のセラフィムに一緒に神に懇願してほしいと頼んだ。そのおかげでその天使は人間として転生する事が出来たが……神はそれは罪だと言わんばかりにその者が転生を繰り返しても記憶を消す事はなく……」
　ナナンは一端、言葉を切り白銀に顔を向けた。
「ある日、子供を連れた男女が現れて『子供を頼む』と言った」
　それ以来、影から見守り続けてきた。それを聞くと白銀は呆れたようにナナンを見てため息を吐いた。
「なるほどね、あんたは『身内』だった訳か……上手く騙されたよ。知らないフリして近づいて面白かったか？」
「すまぬ……言えなかったのだ。親父殿が天界に連れ去られる事を止める事も出来ず、そんな不甲斐ない自分を知られるのが怖かった」

「じいさん1人が止められるなんて思っちゃいないさ。向こうは天使様だからな。人間に何が出来る。だったらなんで俺に近づいた」
「アレを見つけた時、お前さんしか頼れなかったんじゃ……本当にすまん」
「勝手な！」
　するとリャムカが腹立たしげに白銀を睨み付けた。
「お師さまは苦しんでおられたのだ。貴様にそこまで責められる事ではない」
「やめろリャムカ」
「しかし、お師さま……」
「勝手に師匠と弟子ごっこでもやってろ」
「なんだと！？」
「ああっ！　もうっいいから。みんな落ち着いてよ。ケンカしたって仕方ないだろ。そんな事よりこれからどうするかだよ」
「む……」
　ディランの言葉でようやく3人は現実に戻ってきた。冷めたコーヒーを傾けて4人はしばらく沈黙。
「……」
　白銀は自分に起こった事をゆっくりと巻き戻る。いつかは来ると予想していた事だ。だが現実に起こるとどうしていいのか解らない。
　母親から聞かされていたとはいえ半信半疑ではあった。
「お前はどうするんだ？　ディラン」
「どうするって聞かれても……戻る訳にもいかないだろ」
　事の経緯から、どう考えても連邦内部にもサタニストがいる事は間違いない。ディランが戻ったとして、捕まって人質にされる可能性が高い。
「何か策でもあるのか？　シルヴィ」
　ナナンが何か思い詰めてるような白銀に気が付く。
　白銀はしばらく黙っていたが「とりあえず俺を狙ってる組織は『メナス・オリオール』という名前だという事は解っている。まずそ

の組織について調べてからだな」
「メナス・オリオール？」
その名前にリャムカが反応した。
「どうしたリャムカ。何か知っておるのか？」
「はい。お師さまが私の前から姿を消されたあとお師さまを探している時にその組織が随分ざわついていた事があります」
「ざわついていた？　どういう事じゃ。詳しく教えてくれんか」
「私もちゃんと聞いた訳ではないので詳細は解りませんが……その惑星の政府と何かもめ事があったそうで」
一同はため息をついた。その程度ではなんの情報も得られた事にはならない。
「1つ疑問があるんじゃが。確かに白銀の血があればルシフェルを復活させる事は出来る。しかしじゃ、白銀の血だけでなく膨大なエネルギーも同時に必要なはず。そんじょそこらのエネルギー量では無理なのじゃが」
それにディランが応えた。
「あいつらシルヴィを無傷でなくとも良しとしてたよね。それってつまり、その膨大なエネルギーを確保してる。って事なんじゃないの？」
さらにリャムカが「私がその組織に強い印象を持ったのは、我らが故郷に関係しているような事を聞いたからです」
「どういう事だ？」と白銀。
「うむ。『スナイプが存在しているのは、我々の偉大な計画のためなのだ』とか、殴り倒してやろうかと思う発言を政府の人間から逃げながら叫んでいたのだ」
「偉大な計画？　膨大なエネルギー……」
モヤモヤしていたものが白銀の頭の中で徐々にはっきりと形を成していく。
それが1つにつながった時――
「マナ……グロウブ、か」

「馬鹿な！　奴らがそれを手に入れたじゃと！？」
声を荒げて狼狽したナナンだったがすぐに気を取り直した。
「考えられない事ではない。じゃが……スナイプはそのためにあった星などでは断じて無い！」
白銀はそれに溜息をついて発する。
「当たり前だろ。奴らが自分の都合のいいように解釈してるだけに決まってる」
「そうじゃな……うむ」
解ってはいる事だが、第三者にあえて言ってもらえた事でナナンやリャムカは安心した。あの限りなく優しい意識を持つ麗しの故郷が悪魔のためだなどと誰が思いたいだろうか。
「リャムカ、それを聞いたのはどの星なんだ？」
「うむ。カーセドニックだ」
白銀の問いかけにリャムカは腕を組んで応えた。ディランは少し語気を強くする。
「！　あそこは銀河連邦の勢力圏外じゃないか……」
人類統合組織『銀河連邦』は他の星の政府と交流や交渉を続けながら勢力を拡げている。しかし中には地球人を敵視している惑星も存在し『カーセドニック』はその最たる星である。
「じゃが逆に身を潜めるには、打って付けの星じゃろう」
「そういえばカーセドニック人が地球人嫌いなのにはちゃんとした訳があるらしいよ」
ディランがぼそりと言った。
「私も聞いた事があるが。地球人は柔すぎて嫌いなんだとか」
「そりゃそうだろ……あいつら半鉱石じゃないか」
白銀は呆れた。確かに地球人は他の惑星人に比べればかなり軟弱な体をしているだろう。リャムカやナナンのスナイプ人だって地球人よりも相当強靱な体なのだ。
特にリャムカは精神的にも肉体的にも鍛え抜かれていて、ちょっとした鉄板なら軽くへこませる事が可能だ。

だからといって地球人を鉱石のような体を持つ奴と比べられても困るというものだ。そのためかどうか解らないがカーセドニック人にはいくつかのランク付けがされている。
王政で王の血筋は地球で言うオリハルコン、その次の地位がダイヤモンド。
つまりは硬い者順な訳だ。こうなるとその人間は一生、産まれながらに地位が決まってしまう。
正直オリハルコンは実在の鉱石ではないが王の血筋の体は他の鉱石とは違い特殊な構造物なので地球に当てはめるとオリハルコンとなる。
オリハルコンがダイヤより硬い訳でもない。柔軟性があるためダイヤと闘っても勝てる。らしいが……長年続いてきた王政に誰も逆らうはずがなく、今となっては事実かどうかも定かではない。
一番低いのは「ダート」だとか。土塊(つちくれ)と呼ばれてあまり良い待遇は受けない。
「ふむむ……そこにはわしとリャムカで行こう。2人は船で待機していてくれ」
「解った。何かあったらすぐに知らせてくれ」
白銀はそう言うと船は惑星カーセドニックに向かった。

◆第5章〜鉱石惑星

『惑星カーセドニック』
その首都サーシャイアン。
露店が建ち並び活気に満ちあふれている。こうして歩いていても確かに地球人を見かけない。カーセドニック人は地球人を敵視してはいるが好戦的になる訳ではない。
ただ単に『嫌い』なだけである。
「しかしお師さま。どうやって情報を探します？」
「ううむ……そこが問題じゃな。む？」
ふと何かがナナンの目に映った。すかさず彼は駆け足で追いかける。
「お師さま？」
何かを追いかけているナナンの後ろをリャムカはついていった。
一体何を見つけたのだろう……？　入り組んだ路地に入る。
「こりゃ！」
すかさずナナンは追いかけていた人物に持っていた杖を投げつけた。それは走っていた者の足に当たりすっ転んだ。
「イテっ！　なんだよ……うっ！？」
「やはりお前じゃったか。エイルク」

＊エイルク

「お師さま。こいつがどうかしたんですか？」
久しく見せなかった厳しいまなざしでカーセドニック人を睨むナナン。杖を拾い上げカーセドニック人に杖の先を突きつける。
それは逃がさない事を強調していた。
「こやつじゃ『マナ・グロウブ』を持っておったのは」
「！？　なんですって？」
見た処ダートの少年らしいが表情は硬く解りにくい。だが焦っているのが見て取れた。
「何故、逃げた」
「べ、別に逃げてなんかないよ……」
「嘘をつくでない。わしの姿を見たとたん逃げたじゃろう」
「あんたが前においらに酷い事したからだろ！」
「お師さま……何をしたんです？」
「む……」
ナナンはギクリとする。そういえばこの少年からどうやってマナ・グロウブを奪ったのだろう？　その内容をリャムカは聞いていない。
「あまりに驚いてな……ちょいとこやつの足を地面に貼り付けて珠（たま）を奪っただけじゃ」
「……お師さま」
リャムカはあちゃ～と頭を抱えた。有無を言わさず球を強奪するとはお師さまらしくない事をした。
時々こういう無茶をするからリャムカは目が離せないのだ。
「あなたはスナイプを導く老師の1人なのですよ。それを自覚なさってください」
「わかっておるわい！　ちゃんと手加減したからこの者はいま生きておるのだ」
「まったく……呆れて者が言えません。処でお前エイルクと言った

か、何故マナ・グロウブを持っていたのだ？」
「……」
少年は黙り込み視線を泳がせた。それにナナンはイラつく。
「もうよい。リャムカ行くぞ」
「はい」
その言葉にホッとしたエイルクだったが……
「のわっ！？」
リャムカに首根っこを掴まれズルズルと引きずられた。
「えっ……ちょっ……？」

「あいてっ」
エイルクは床に投げられ頭をさする。
「……」
目の前の少年（だと思う）に白銀とディランは眉をひそめた。
「さてと」
ナナンは言いながらイスに腰掛ける。
「……ジィさん。なんだこいつは」
「カーセドニック人だ」
「そんな事解ってる」
リャムカの言葉に白銀はさらに眉間に縦じわを刻んだ。
「エイルク。マナ・グロウブを手に入れた経緯、話してもらうぞ」
「！」
それに白銀とディランはダートの少年を凝視した。
「……」
自分を見つめる多くの目に仕方なくエイルクは口を開いた。
「散歩してたら、たまたま見つけたんだよ」
散歩と言えば聞こえはいいが彼はこの街から出て行こうとしていたのだ。
上級層の多いこの街に最下層であるダートの彼がいるには辛すぎる。両親を早くに亡くした彼は上級層のおこぼれをもらって生きて

いた。
食べ物には困らないがダートである事は屈辱を受ける以外に何も無い。そんな街外れで見つけた珠……美しく色を変えるその珠に少年は魅入られて家に持ち帰った。
家といってもただ捨ててあった板を囲っただけの貧相なもので見ようと思わなくても中が見えてしまうほどの造り。
どうやってこの球を売りさばこうか考えながら寝床について朝――目覚めると……
「2つになってたってぇ！？」
ここまで話を聞いていたディランが素っ頓狂（とんきょう）な声を上げる。
「初めの球はどれくらいの大きさじゃった？」
「えと……」
エイルクは考えながら手を動かす。思い起こした大きさと一致した時、止まった手にナナンはあごに手をあて溜息を漏らした。
「ふむ……まとまるにはまとまったがいささか大きかったのかもしれん。自然と分裂してしまったのじゃろう」
「で、2つあってもう1つはどうした」
白銀が静かに問いかけるとエイルクは頭をポリポリとかいた。
「それがさ……」
1つ持って売りに行こうとした時にナナンに見つかり球を奪われ、仕方なくもう1つを売ろうかと家に戻ったら無くなっていた。
「……」
一同はあっけにとられる。
「じゃあ……そのもう1つをあいつらが盗ってったって事？」
ディランの言葉にナナンは頷いた。
「そうとしか考えられんの。しかし大きな1つだったものが2つに分かれたのじゃ。エネルギーは普段出来るモノより多少、少ないかもしれん」
「それでも危険なエネルギー量に変わりはないんじゃないのか？」
白銀の言葉にナナンは両腕を組んで黙り込んだ。

「お師さま。これではどうにも動けませんな」
やはり情報が少ない。
「うむ。ああ、エイルクもう良いぞ」
ナナンはちょいちょいと手の甲で帰れと示す。
「……」
しかしエイルクはナナンをじっと見つめて帰ろうとはしなかった。
「どうした。もういいんじゃぞ」
「いやだ」
エイルクの声に白銀は眉をぴくりと動かした。
「あんなトコに戻るくらいならあんたたちについていく」
「おいおい……」
白銀は呆れて少年を見やる。
「ガキを連れ歩くほど俺たちは暇じゃない」
立て。と白銀はエイルクの腕を掴もうとした。しかし彼はそれを激しく拒否すると声を張り上げてまくしたてる。
「おいらが見つけた球であんたたちが困ってるんだろっ？　だったらおいらにもその責任を取らせてくれよ！」
おいらだって役に立てるよ！　言った少年に白銀は目を据わらせる。
「ここから出たいから言ってるんだろう？」
「うっ……」
ディランは声を詰まらせたエイルクに小さく笑いかけしゃがみ込む。
「君の気持ちは解るけどね。危険なんだよ。命が無いかもしれない」
「どうせここにいたって同じだよ。死んでないだけで何も出来ない」
少年は肩を落とした。生まれる前から決まっている地位に彼らに為す術はない。それから逃れるためには故郷を捨てる他は無いのだ。
「どうせ……おいらがいなくなっても誰も泣いちゃくれない」
「お前いくつだ？」白銀が尋ねる。
「カーセドニック年数で１２」

「連邦年でいえば15だな」とリャムカ。
白銀はため息を吐き出しエイルクを見下ろすと腕を組んで発した。
「後悔するなよ」
「いいの！？」
喜ぶエイルクをよそに白銀とナナンそれにリャムカは何かの気配に反応した。
突然――近くに今までに無い気配が現れたのだ。この気配は……すでに船内にいる。どこからともなく出現した気配。ナナンはその気配が何なのかを知っている。
近づいてくる3つの気配。
「えっ？」
開かれたドアにディランは驚いてそちらに振り向いた。そこにいたのは3人の男。輝くような容姿。少し人間離れしているほどに……

＊下級三隊

「何しに来た」
「これはこれは。手厳しいな」
ずい……と前に出て睨みを利かせたナナンに男の1人が薄笑いで応える。そして別の男がナナンを見下ろし鼻で笑った。
「これがかつての仲間とはね……随分と醜くなったものだ」
「外見にしか興味の無いお前さんがたにはわからぬよ」
「今日はお前に用があって来たのではない」
最後の1人がそう言うと初めに口を開いた男が白銀に目を向けた。その足を彼の前まで進めて瞳をじっと見つめる。
「！」
戸惑う白銀を無視しじっくりと見定めたあと口の端をつり上げた。
「なるほど。確かに美しい。あの方に目元がよく似ておる」
そのあとに二人目の男が薄笑いを浮かべて発する。
「しかし残念かな。人間の血が半分、入っているためその美しさも半減している」
「！」
半ば馬鹿にするような口調に白銀はムッとした。
「あんたら何なんだよ」
「お前たちに用は無い！　去れ、権天使ども！」
「えっ！？」
語気荒く放ったナナンの言葉にディランたちは3人の男を凝視した。
「お前に用はなくともこちらにはあるのだ」
3人の中で一際（ひときわ）、存在感を放っている男はナナンを一瞥し白銀に向き直る。
「シルヴェスタ。父を助けたくはないか」
良く通る声で問いかけた。

「！　何？」
そのあとに少しくぐもった声の男は説明を加える。
「お前が天に戻る。というなら父なる神はお前の父であるセラフィムを解放しよう。とおっしゃられたのだ」
それに激しく反論したのはナナンだ。
「お前たちはそうやって……っ！　シルヴィは神に渡さぬ！　決して！」
「決めるのは貴様ではない。彼自身だ」
笑って言い白銀に手を示す。
「親父を……？」
「悪い話ではないだろう？」
白銀の感情を見透かすようにその不思議な色の瞳を細める。
「天に戻れば人の血も失せさらに美しくなるだろう」
別の男が白銀を見てささやく。
「戻る戻ると……シルヴィは元々、人界の者じゃ！」
「少し……考えさせてくれ」
白銀は目を伏せて言った。
「いいだろう。決心した時はいつでも呼ぶがいい」
1人がそう言うと他の男2人はそのあとに続いて部屋から出て行った。
「シルヴィ。奴らの言葉を真に受けるんじゃないぞ」
ナナンは言い聞かせるように白銀に厳しい目を向けた。
「権天使って何？」
「今それを質問するのか……」
ディランの質問にリャムカは呆れて溜息混じりに見つめる。
「……あやつらは第七階級のプリンシパリティーズと言って下級三隊の1つじゃ。人間にもっともよく似ている階級の1つ」
「なるほど、だから彼らが白銀の交渉に来た訳ですか」
ナナンの説明にリャムカは納得した。
「でも、なんだってシルヴィを天国に？」

ディランは首をかしげた。
「ルシファーの位階に就いたセラフィムの子である事に関係しておるのじゃろう。あの位階は美しい天使が座する階級じゃからな。神は美しいものが好きなのじゃ」
「へえ……」
それにディランは白銀をマジマジと見つめた。
まあ……確かに綺麗だとは思うけど……眉をひそめるディランにナナンは付け加える。
「今はまだ人間の血が濃いためはっきりとした性別が見て取れるが。力を最大限に発揮出来ればその姿はわしらには目視は難しいじゃろう」
「！　そうなの？」
ディランの声にナナンは頷く。
「うむ。天使はこの次元よりも高い次元の存在じゃ。3次元のわしらとは細胞の振動数が異なりとても高い。じゃからわしらの目には……」
「ちょっ……ま、待って。細胞の振動数……？」
ディランは訳のわからない話になってきて目を丸くした。
「そうじゃよ。細胞は振動しておるのじゃ。細胞のみならずこの世にあるありとあらゆるものは振動しておるのじゃ」
「ふ、ふ～ん……」
だめだ……聞いても解らない。
「とにかく……天使は高次元の存在だから俺たちにはハッキリ見えないって事だよね？」
「うむ」
「……」
白銀は間の抜けた彼らの会話に目にも留めず考え込んでいた。
「シルヴィ。変な事は考えるな」
「！」
ハッとしてナナンを見つめる。

「でも……俺がいなくなれば奴らもルシフェル＝サタンを復活させようなんて気は起きない」
「馬鹿者！　誰かが犠牲になってそれで良し。なんてあるはずが無いじゃろうが！」
「それは私も同感だ。お前がいなくなって我々がさっぱりするとでも思っているのか」
リャムカが両腕を組んで言い放った。
「お前……親父さんに会ってみたいんだろう」
「！」
ディランの言葉にナナンたちは白銀を見やった。
「……」
白銀は視線を外して少し苦い表情を浮かべる。
まだ見ぬ父親――一体どんな人物なのだろう？　人間を愛したというだけで罰を受けイバラの牢獄に永久に閉じこめられた父。
自分が天界に行くだけでそこから解放されるなら……
「それこそ馬鹿者じゃ。そんな事をして彼が喜ぶとでも思っているのか。そんな事をすればまたお前のために罪を重ねるだけじゃ」
「！　罪を重ねる？」
「今度は本当に神に叛（そむ）くかもしれん」
その言葉に白銀は眉をひそめた。
「なんのために私に『後を頼む』と彼が言ったと思うのだ。全てはお前のためだ」
ナナンは白銀の両手を握りしめ必死に言い聞かせた。昔の言葉遣いに戻っている事にも気付かずに……
「お前はお前の道を進むこと。それが彼のもっとも望む事だ」
「……」
白銀はナナンの深い瞳を見つめる。
「わあっ！？　びっくりした！」
突然、通信が入った事を知らせる音でディランが声を上げた。
「……？」

白銀が見た画面には見慣れない男が映っている。
＜やあ、初めまして白銀＞
落ち着いた声。しかしその顔はニヤリと下品な笑みを浮かべていた。
「誰だ」
怪訝な表情で見つめる白銀。
＜さて、言いたい事はすぐに解ると思うが＞
「？　……！？」
画面をじっと見つめていた白銀だが何かに気がついて画面の男をギロリと睨み付けた。
「キサマ……」
＜早く来たまえ。ああ、私の名前はアルシオ＞
黒髪に黄色い目。見た処、地球人らしい男はにっこりと笑って通信を切った。何も映さなくなった画面を睨み付け横の壁を強く殴る。
「シルヴィ？」
そんな白銀を見てディランはいぶかしげに近寄った。
「行くぞ」
険しい表情でコックピットに向かう。
「えっ！？　ちょ、おいっ」
慌てて白銀のあとを追うディランに舌打ち混じりに応える。
「あいつ……オルセオニカにいる」
「！　なんだって？」
「確か医療惑星じゃな。それがどうした？」
白銀とディランの後ろを付いていきながらナナンは訊ねた。
「シルヴィの母さんがいる星だよ」
「！？」
ナナンの顔が強ばる。
「サポート頼む」
乱暴にシートに腰掛け白銀はエンジンを起動させる。
「うん」

ディランが隣のシートに座った。
「なあじっちゃん、どうなってんの？」
展開の解らないエイルクがナナンに小さく問いかける。
ナナンはああ……と小さく発すると説明するためエイルクと再びリビングに向かった。リャムカはトレーニングルームに足を向ける。
自分に今、出来る事は体を鍛える事。そう決めてトレーニングを始めた。己に要求されるのは持っている力だとリャムカは知っているからだ。
船は急遽、医療惑星オルセオニカへ――

◆第6章～恍惚と堕落の先

カーセドニックから遠く離れた星系にその惑星は存在する。ハイパー・ドライヴを使っても途中の惑星で給油を行わなければならない。

オルセオニカの大気は澄んでいて療養するのに適した星なのだ。

「……」

白銀は苦しい表情で星々の流れるサマを眺めた。

母の容態……それは明るいものではない。彼女もそれを知っている。

「あと何年かの命」という事を。

途中の惑星で給油をし、たどり着いた『惑星オルセオニカ』

美しく七色に移り変わっていく空。ここのマナは誰にも優しく心を穏やかにしてくれる。

「……」

地に足を降ろしたナナンの表情は硬い。以前、来た時よりも大気のマナが敏感に何かを察知している。

一同は小型艇で白銀の母親のいる施設に向かった。その間も白銀の表情は険しい。しばらく飛んでいると白い建物が眼下に広がる。

その入り口に降り立つと白銀は足早に建物に向かった。

「！」

白衣を着た女性に駆け寄る。

「あら、アークサルドさん」

「すいません！　母は……」

＊アルシオ

白銀を見つけた看護婦にさっそく母親の事を訊ねる。すると看護婦は小さく首をかしげて応えた。
「え？　先ほど様子を見ましたけどぐっすり眠ってらっしゃいましたよ」
「！？」
聞いた全員が目を丸くした。

「どういう事だ？」
リャムカが施設から出て口を開く。
「シルヴィをおびき出すための罠だったのかな？」
ディランは腕を組んで眉をひそめた。
「それが正解じゃろうな」
「……」
白銀は小さく舌打ちをする。
この施設に母を預けたのもセキュリティに安心があったからだ。そのセキュリティをかいくぐって彼らが母を拉致したのであればかなり怖い相手だという事になったのだが……
「とりあえずどうする？」
ディランが聞いた刹那――
「全員おそろいだな」
小型艇に乗り込もうとしていた一同にアルシオは小さく両手を広げて笑いかけた。歓迎の証とでも言いたげに……黄色い瞳を白銀は睨み付ける。
「やあ、画面で見るよりも綺麗な白銀の髪だ」
彼の怒りを無視するように平然と言い放った。
「貴様」
「来てもらうよ。セラフィムの息子」

アルシオの瞳孔が縦に伸びる。
「！？」
白銀は体の自由が利かない事に気付いた。こいつの能力は……！？
「！　シルヴィ？」
動かない白銀をナナンは一瞥しアルシオに視線を移す。
「おぬし『影縫い』か！」
「ご名答。気付くのが遅いけどね」
そう言った瞬間――
「うっ……！？」
建物の影から大勢の武装した男たちがナナンたちを取り囲む。アルシオは勝ち誇った笑みを白銀に向け目を細めた。
「さあ、おいで」
右手を上品に白銀に向ける。
「うっ！？」
「シルヴィ！」
足がゆっくりとアルシオに歩みを進める。ナナンはそれを見ているしかなかった。
「良い子だ。眠れセラフィムの子よ」
「……っ」
目の前に来た白銀にそう言うと抗う事も出来ずに白銀は意識を失った。倒れ込む白銀の体を支え横抱きに抱える。
「それじゃあもらっていく」
ナナンたちに言い放ちアルシオは白銀を抱えて飛行艇に乗り込んだ。
乗り込む間際（まぎわ）「殺せ」と冷たい視線で部下に命令した。
「……来るぞ」
リャムカは男たちの殺気を感じ取りディランたちに小声で発する。
一斉にナナンたちに銃口が突きつけられた。
「ハァ！」
ナナンが声を張り上げ両手を勢いよく広げると衝撃波が広がった。

「うっ！？」
「何っ？」
男たちはそれにによろめく。
それをきっかけにリャムカは近くにいる敵から順に攻撃を加えていった。ディランも銃を取りだし応戦する。
「小型艇に！」
ディランは声を張り上げ皆は小型艇に走り出した。
「わぁーっ！？　こええー！」
エイルクは頭を抱えて体勢を低くし必死に駆ける。

小型艇に乗り込みなんとか怪我もなく逃げ切れたナナンたち。
「こええぇ～」
震えるエイルクにナナンは呆れて溜息を漏らした。
「何言っとる……おぬしはダメージなかろうが」
「無くても怖いもんは怖いの！」
鉱石で出来ているエイルクの体はレーザーや銃弾（カートリッジ）の武器に強い。最も地位の低いダートでさえその体は強靱なのだ。
さすがにミサイルなどには耐えられないが。
「で、どうすんのこれから」
落ち着いた処でディランが話題を振った。
「シルヴィの気配を追う。この惑星はマナが澄んでいるのじゃ。奴らの悪意も遠くからでも嗅ぎ取れる」

一方――アルシオの乗る小型艇。
「……」
自分の横のシートに寝かせた白銀を座らせてその顔を眺めた。
熾天使（してんし）は天使の階級の最上位に位置する位階だ。そのルシファーは最も輝きを放ち神に愛されていた。
しかし神が別の者を称えた時、嫉妬でルシファーは狂った。そうして彼は神の敵（サタネル）となったのだ。

1時間ほどして小型艇はとある建物の前に降りる。白銀を丁寧に抱きかかえアルシオはその白い建物に入っていった。
まるで地球のローマ時代を思わせる雰囲気。掲げられた紋章が悪魔の象徴でさえなければ美しい建造物だ。
アルシオが奥に進んでいくと途中で色白の細長い男が隣に立ち同じように歩き出した。
「とうとう手に入れたか」
「ああ」
甲高く響く足音。色白の男は白銀の顔を確認しアルシオに話を振った。
「こんな場所で召還しても大丈夫なのか？」
「彼らは高次元の存在だ、距離など意味が無い」
アルシオは半ば呆れたように応えた。
地球では神、天使、悪魔と呼ばれている高次元の存在。それは他の惑星の人間から見ればまた違った名称を示す。
その力を利用出来れば……アルシオはそう考え彼らサタニストたちと共にいるのだ。彼はサタニストたちを見下している。神秘的な存在だと思っている彼らを。
高次元の存在に勝手な解釈を付けて神格化しているに過ぎない。アルシオはそう考えていた。
『そもそも神などいるものか』彼は鼻で笑う。
しばらく歩くと広い部屋にたどり着いた。地球の大理石に似た祭壇。地面には祭壇の上と手前に魔法円が2つ描かれている。
異様な雰囲気……それにさして気にも留めずアルシオは白銀を祭壇に静かに寝かせた。
「……」
白銀の寝顔に目を細める。そしてすっと無表情になり、そこにいるサタニストたちに目を移した。
「奴らが追ってくるかもしれない。さっとさ召還を始めよう」

その時代に見合ったアイテム。召還にはそれが必要だ。
時には『トカゲの尻尾』のような意味の解らない物もあった。この次元に存在し続けるのに必要な要素。それを並べるに過ぎない。召還時に口にする言葉も必要な要素の１つ。
「……」
口々に発せられる奇妙な言葉のつづり。声は徐々に力を増していき叫び声になる者もいる。
タイミングを計ってアルシオは白銀の腕に銀色の刃を走らせた。
「……っ！」
痛みで目が覚める。
「お目覚めかい？」
「！　お前はっ……」
起き上がろうとしたが力が入らない。
「そこで大人しくしていろ。ルシファーの恋人よ」
「……恋人？」
眉をひそめる白銀にアルシオは薄笑いで目だけを向けた。
「殺されるとでも思ったのかね？　君は目覚めたルシファーの恋人になるのだよ」
「冗談じゃない……」
しかめっ面で応えた白銀に鼻で笑って目線を前に戻す。
「彼が目覚めれば君の人の血も消されるだろう。そうすればこれ程ふさわしい相手はいないと思うがね」
「貴様っ」
白銀はそんなアルシオの背中を睨み付けた。
「ルシファーは両性具有だ。いいじゃないか元セラフィムを抱けるのだから」
「ふざけるな」
「おっと、呼んでもいない客人がご登場だ」
会話をさえぎるようにアルシオがそう言うと部屋の隅に現れたのは……

「！　権天使か」
白銀に天界に昇るように交渉に来た3人の人物が憎々しげにアルシオを見つめていた。
「プリンシパリティーズども、そこで眺めているがいい」
「ルシファーを目覚めさせるなど！」
1人の権天使は歯ぎしりした。それにアルシオは薄笑いを浮かべて発する。
「しかし、もう動けまい。ルシファーの気が充満してきているからな。たかが権天使ごときがどうこう出来るレベルではなくなっているのだよ」

「！　ジィちゃん、あれ」
エイルクはコクピットから見える眼下に指を差した。他の建造物とは明らかに違う造り。
「うむ」
ナナンは神妙な面持ちで頷いた。
ディランの操縦する小型艇は建物の近くに着陸。下から見ていたサタニストたちは一斉に小型艇のハッチに武器を向けた。
しかし……
「……？」
ハッチが開かない。と怪訝な顔で見つめていると――
「！」
ハッチがゆっくりと開かれ緊張が走る。しかし誰も出てくる気配が無い。

＊頬に添えられた手

どうしたものかと当惑していると突然、素早い何かが飛び出してきて仲間たちを打ち倒していく。
「うっ！？」
その緑色の影は一通りサタニストたちを倒し持っていた武器も弾くと立ち止まった。
「こんな動きにも追いつけんのか。情けない」
ニヤリとリャムカが笑う。
「きっきさま！？」
「もうよい。争うのは無駄じゃろう」
ナナンがサタニストたちをなだめるように言いながら出てきた。
「そうそう。みんな仲良くね」
ディランが呑気に言い放ちニコニコと笑う。
「……」
その明るい雰囲気に毒気を抜かれ肩を落とした。
「お師さま」
「うむ、急ごう」
４人は足早に建物に入っていった。
入ってすぐ特殊なレーザー武器を持った男が数人ナナンたちに銃口を向けてきた。
「わあっ！？」
「エイルクそのままじゃ」
「ええっ！？　いくらおいらでもこのレーザーは無理だよ！」
「いいから黙っておれ！」
ナナンは何かの言葉を口の中で唱え右手をエイルクにすいと向ける。その動きと男たちが引鉄（ひきがね）を引いたのとはほぼ同時だった。
「ぎゃー！　……ってあれ？」
死んだと思って両手を挙げたエイルクの体は鏡のようになり敵の

攻撃を乱反射していた。
「……何これ」
ディランがぽかんと見つめているとリャムカが説明した。
「物質の変換だ。一時的に彼の表面の組織を変換した」
「うわ、すげ～」
エイルクは自分の体をマジマジと眺める。
「鉱物がいて役に立ったな」
リャムカは皮肉混じりに応えた。乱反射とはいえ攻撃した男たちはダメージを受けたようだ。うずくまって唸りを上げている。
「とにかく奥じゃ！　とんでもないエネルギーを感じる」
キラキラと輝くエイルクを手前にしてナナンたちはさらに奥に走っていった。

「おいらを盾にすんなよ！」
「ここで役に立たないと故郷に送り返すぞ」
「……」
リャムカの一言でエイルクは黙り込んだ。
「……」
鬼だなリャムカ……ディランは彼の後ろ姿を見つめる。
一応その手にサタニストたちが持っていた武器を持っているがこんなものが役に立つのか不安だった。
それでも親友を助けるためディランの目はいつになく真剣だ。

「なんというエネルギーだ……」
権天使の1人は部屋を見回した。
「これはマナ・グロウブの……」
「そう。このエネルギーにより次元の扉は開かれる」
増大していくエネルギーにアルシオは口の端をつり上げた。
「！」
白銀は魔法円の文字と位置に気が付いた。

「シルヴィ！」
そこへディランたちが現れて白銀は「まずい！」という顔をする。
「ディラン逃げろ！　そこにいてはだめだっ」
必死に声を張り上げた白銀にナナンはすぐに察した。
「こりゃまずい！　白銀のいる魔法円に入るのじゃ！」
「え？　どういうコト？」
「いいから走らんか！！」
首をかしげているエイルクにナナンは怒鳴る。
「！」
駆け足で魔法円に入ってきたナナンたちにアルシオは小さく舌打ちした。
エネルギーの制御と権天使たちの動きを止める事で手一杯なため彼らに攻撃をしかけられない。
「くっ……このままでは我らも危ない」
必死で耐えていた権天使たちは仕方なくその場から消えた。ほっとしたアルシオが次はナナンたちだと顔を向けようとした時――
「うわぁ！？」
「一体何がっ」
「助けてくれっ！」
白銀たちとは違う魔法円にいたサタニストたちが次々に消えていく。
「どういう事……？」
ディランが恐る恐るナナンに訊ねた。
「本来、悪魔は魔法円の外に現れるんじゃ。正しい文字を描いている限り奴らはこの中に入る事は出来ん」
魔法円とは召還者を守るものなのである。
ナナンは応えたあと目の前の黒い渦を凝視した。
「とうとう……ルシファーが」
杖を持つナナンの手が震える。
「ぐ……っ」

リャムカでさえも迫り来る強大な気配に顔をゆがめた。
「……」
白銀の鼓動が大きく脈打つ。だめだ……奴をこの世界に呼んでは。
刹那――
「！」
何かが頬をかすめた。白銀はその感覚に微笑む。
「そうか……解った。ありがとう」
「シルヴィ？」
その表情にナナンは眉をひそめた。

◆新たなる旅立ち

「俺の後ろにいてくれ」
白銀はナナンたちにそう言うとふらつきながらゆっくりと立ち上がる。
「！」
アルシオは驚いて近づこうとしたが――どういう訳か動けなくなった。
「……！　まさか私の術を……？」
アルシオの隣に立った白銀はもう1つの魔法円の中心に渦巻くエネルギーを見つめながら口を開く。
「ジィさん。トレーニングの時に言ってたよな……俺の力は本来は回復の力だと。そしてバランスを保つ力だと」
「そうじゃ……」
目を一度閉じて白銀は小さく笑う。次に目を開いたときそれは輝くような鮮やかな緑だった。
「力の発動！？　だめじゃ！　おぬしにはまだ……」
「追い返さないとだろ？」
言った白銀に言葉が出ない。
「くっ……リャムカ！　同調じゃ！」
「誰にですか？」
「わしに力を送り込め！」
リャムカはその言葉にナナンの肩に手を添えた。
「少しでも……シルヴィの負担を和らげないと」
両手を白銀の背中に向ける。
「シルヴィ！」
ディランの声に白銀は目だけを彼に向けた。
「！」
白銀の目と、ちらりと見えたその口元の笑みにディランはキッと

目をつりあげて白銀に駆け寄る。
「！　ディラン」
慌てるナナンにニコリと笑った。
「大丈夫」
そう言って白銀の肩に手を置き白銀はそれにぼそりとつぶやく。
「……ありがとう」
「お前らしくないな、それ」
「！」
そんな2人のやりとりの背後にナナンは別の意識も見て取った。
それは暖かくやさしい意識の結晶体。
「……そうか、だからシルヴィは」
「はっはぁ！　無駄だと言うのに。今更このエネルギーを押し返すだって？」
アルシオは余裕の笑みを浮かべてまるで余興を楽しむように白銀たちを眺めた。
「うっ……」
ますます増大していくエネルギー。白銀は思わず小さく声を上げる。
使う相手によってあの優しかったマナ・グロウブの力がこんな邪悪なモノになるなんて……それに驚きながらも白銀は渦巻くエネルギーを見据えた。
「支えていてくれ！」
「当然！」
渦巻いていたエネルギーが徐々に何かを形作っていく。
それは――3対のコウモリの翼を持つ人型。尋常ではないその美しい容姿が白銀を誘うように見つめた。
まだ完全に目覚めた訳ではないルシファーは荒れ狂うエネルギーの中、少しずつ白銀に近づいてくる。
「お前など必要無い……元の場所に還れ」
白銀が言い放った刹那――

「！？」
まばゆい光が部屋を包んだ。その輝きの中……白銀に微笑む女性。
「さすがねシルヴィ……」
「……ライナ」
白銀の頬にキスをしてライナは遠ざかる。

光が収まった時、エネルギーの渦もルシファーも消えていた。
「ばっ……馬鹿な！！」
あれだけのエネルギーを抑えたというのか！？
力を使い果たした白銀は片膝をつき肩で息をする。アルシオは凄い形相で白銀を睨み付けると力強く右手を白銀に向けた。
「よくも……」
「おっと」
「！？　がっあっ！」
リャムカの声と共にアルシオは全身に電流が流れたような衝撃を受けた。
「わしらの事を忘れんでいただきたい」
ナナンがしれっと応える。その手はアルシオの足に触れていた。
「きっ……きさまら」
「……」
そんな光景に白銀は目を丸くした。
「は……ははは」
自然と笑いがこみ上げる。

「こいつどうする？」
ディランが縛り上げたアルシオを見て問いかける。
「力を奪って解放すればいいじゃろ。マナ・グロウブも無くなったのじゃし」
「や、やめてくれ……力を奪われたら生きていけない」
今までの威勢はどこへやら、力なく懇願した。

「まあ頑張れ」
白銀はにこりと笑ってアルシオの肩にポンと手を置いた。
「でもシルヴィの天使姿も見たかったな～」
「言ってろ」
アルシオを解放して小型艇に向かいながら会話を交わす。
「！」
その目の前に現れた権天使の3人に身構えるナナン。
「返事を聞かせてもらおう」
権天使の1人が白銀を見つめた。
「……」
白銀の言葉を一同は固唾を呑んで見守った。
そんな彼は、フ……と笑みをこぼすと権天使たちに発する。
「ここは最高だ。悪いが他をあたってくれ」
「シルヴィ！」
「……そうか」
喜ぶディランたちを見つめて権天使はつぶやくように応えた。
「君たちの邪魔をしてすまなかったな」
言いながら消えていく。

「あ、そういえばさ～」
ディランが思い出したように発した。
「実は俺もあいつらに勧誘されてたんだよね」
「！　天界にか！？」
ナナンがギョッとした。
「なんか魂がどうのこうのって。丁重にお断りしたけど」
あっはっはっ……と気楽に笑う。
「どういう事なんだ？」
「彼の魂は純粋なんじゃ。それに目を付けたんじゃろう」
問いかけた白銀を一瞥しナナンはへらへらと笑っているディラン

の背中を見やり応えた。
「きゃっほーぅ！　おいらは自由だー」
エイルクはエイルクではしゃぎまわっている。
「……」
少年の言葉から察するに白銀についてくるつもりなのだろう。それが見て取れて彼は一瞬、呆然とした。
「……もしかしてお前らも」
ナナンとリャムカに目を向ける。
「当然じゃ」
「うむ」
「マジかよ……」
前途多難の一行に白銀は深い溜息を吐き出した。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3562r/

Expansion－エクスパンション－

2011年8月31日03時32分発行